



こんな映画を観てきた

アパートの鍵貸します

1960 米

監督: ビリー・ワイルダー

★ジャック・レモン

★シャーリー・マクレーン

これぞアメリカ映画の教科書ともいえる作品だろう。「おかしくて、やがて哀しき…」の典型。主演二人の手形足型を見にチャイニーズシアターを訪ねて、何と40年になる。

昭和の“沁みる”唄

哀愁の街に霧が降る

作詞: 佐伯孝夫

作曲: 吉田 正

唄: 山田真二、久保浩

日暮れが青い灯つけてゆく
宵の十字路
泪色した霧がきょうも降る
忘れぬ瞳よ
呼べど並木に消えて
ああ哀愁の街に霧が降る

10.March.2021

Vol.22

お楽しみはこれからだ 3月は『菜の花』

YAH!

ヤー! YOU AIN'T HEARD NOTHIN' YET!

おんな占い

この時代、もしかするとこんな唄は“放送禁止歌”ということになるのかもしれない。女性蔑視も甚だしいわけで、私もそう思う…

しかし、確かにこうした唄は存在したし、少しはヒットしたように記憶している、いわゆるムードコーラスだった。

作詞 二条冬詩夫

作曲 村沢良介

唄 南有りとフルセイルズ

胸にほくろのあるひとは 好きな男に騙される

ダイヤの指輪をしていても

あのこは悲しい恋に泣く

名前ばかりを取り換える あのこお金に縁がない

左に髷(えくぼ)のかわいいこ

小さな店のママになる

確かに、昭和では成立しても、現代ではありえない世界、あってはならないはずだが、とにかく深夜もさらに深く、新宿のこれまた奥深い場所で8トラバックに唄っていたのである。世紀末にはまだ少々時間があつた頃の話だ。

誰もいうことをきかない!

信用できない相手から、いくら頼みごとをされても、そのまま「承りました…」というわけにはいかないだろう。“飽き飽き”でも、“自肅疲れ”などではありえない、要するに目に留まらず、耳に入って来ないだけのことだ。ではどうすれば…範を示すなど(お願いしたいのはやまやまだけれど…)という更に空々しくも身勝手に根拠もない、説得力の欠片もない対策などは論外である。かといって、従順でない者たちへ「ペナルティを科す!」というのではあまりに短絡に過ぎて、むしろ

不満を増幅して逆効果になるかもしれない。高額接待を受け、それを咎めるどころか、己が身に“災い”が及ぶのを恐れてか、とにかく隠せ隠せと奔走する側の人間が、“向こう側の一般人”に何を言っても響かないのは当然のことで、本来従順であるはずのこちら側の人間としては、とにかく正しい(脚色のない)情報を待っているのである。そうすれば対策はおのずと何処からか、あるいは自らの発想、創意工夫そしてバランスのとれた裁量で明らかになるだろう。